![C:\Users\zenrin\AppData\Local\Microsoft\Windows\Temporary Internet Files\Content.IE5\OYLOII2Q\MC900228485[1].wmf]()園長だより　平成２８年度３月号（2017.3.17）

　園長　平澤　正則

皆勤賞　精勤賞

　この賞をもらえないでじっと座ったまま，他の子らが賞状をもらっている様子をながめている子がいる光景がずっと気になっていて，表彰式の最後にはそういう子らに必ず励ましの言葉をかけることを心がけてきましたが，どうしたら良いものかと私はずっと考えてきました。

　私ごとですが，小学校３年生の時から高校３年生まで１日も休まず学校に通い，中学校の卒業式では３年間の皆勤賞をいただきました。自分のがんばりが評価されとても誇らしく感じたことを覚えています。高校では皆勤賞の制度がなく表彰はありませんでした。小学校２年時にはしかで１週間休んだのと１年時に１～２日休んだ記録がある（通信簿を持っているのでわかります）だけでしたが，小学校では皆勤賞をもらえずひどくがっかりした覚えもあります。そういう悲喜こもごもを思い出しながらずっと（３年間も）考えていました。

　本園では，皆勤賞は欠席０日（出席停止日数は数えません），精勤賞は欠席３日以内の園児に与えられます。

毎学期ごとに終業式の中で担任の先生から各組の受賞者が呼名され，一人ひとりに園長が賞状を授けています。そして，学年最後の修了式や卒園式ではその年１年分の皆勤，精勤についても賞状を出しています。各学期ごとに受賞のチャンスを与えていることもあり，チャンスはどの子にも結構あるので取り立てて不平等であるとも考えづらい状態です。がんばって登園した子を皆の前で讃えることはその子に自信をつけさせる有効な手段でもあります。

一方，そんなにチャンスの多いことに対していちいち園長名で賞状を与える必要があるのだろうか。卒園証書以外で現在だしているものはこれらの賞だけであり，誉め讃えるものの対象として他にはないのかなど，今後の課題として考えられます。

　百年前から続く卒園生名簿をひも解くと，初めて“精勤賞”が登場したのが昭和１０年度（昭和１１年３月２５日卒），第１８回卒園生の“青木光也（Ｓ４．９．６生，金丸町）”さんの時です。“皆勤賞”の文字が初めて現れるのが昭和４１年度（昭和４２年３月２２日卒），第４９回卒園生の時代です。ですから，歴史としては結構長く続いているものではあります。ちなみに，詳しく調べてはいませんので大雑把な言い方になりますが，公立の小中学校や高等学校では近年これらの賞の存在は耳にしません。

胃腸炎やインフルエンザが流行ったせいもあり園児の出欠を毎日注視する中で，今年特に感じたことがあります。

それは，“少し熱があるけれどもがんばればいける。でも，もし流行性の病気だったら他の子に移してしまうかもしれない。”と判断して登園を見送らせる保護者がいるよう思います。また，“ひょっとしたら他の子に移してしまうかもしれないけどそれほどひどくもないし，仕事も休みづらい”という理由で登園させる保護者がいるかもしれません。それぞれの事情を考えればどちらを選択するかはその時々により様々と考えられます。そういう中で授賞の判定をするのは困難です。あれやこれやといろいろ考えたどり着いた結論は，本園の皆勤賞，精勤賞を来年度から廃止するということです。

　今後は，子どもたちの発達，成長を促す別の方法を探っていきたいと思います。ほめるべきこと，自信をもたせ誇りをもたせる方法はほかにもあるはずですので，職員一同さらに研鑚していかなければならないと考えます。